

## 地方出身大卒者が地元に戻る理由，戻らない理由

－山形県山形市，鶴岡市を事例に－

### 岡村 貴 康

近頃「地方の時代」という言葉を耳にすることが多い。改革派のリーダーの先導によって、地方は今まさに“自立”しようとしている。しかしそのためには、発展を進める上でのイニシアチブを中央から地方に移行することが不可欠である。それによって地域全体の起業ムード・向上意識を高め、「自前」の産業を成長させる必要がある。そのためには若い優秀な人材の力が不可欠である。そこで本稿では地方出身の大卒者の就職地選択の実態について考察した。

山形県山形市と鶴岡市出身の男性大卒者(26～30 歳)を対象に、郵送によるアンケートとインタビューによる調査を実施した。アンケート調査は山形市出身者 824 名、鶴岡市出身者 615 名、計 1439 名に対して調査票を配布し、山形は 118 名、鶴岡は 52 名より回答を得た。さらにその中から選んだ 11 名に対してインタビューを行なった。

その結果、就職地選択に影響を及ぼす要因として以下の 4 つが確認できた。

- ① 大都市－地方都市間の就業機会格差
- ② きょうだい構成＝長男であるか否か
- ③ 就職者自身の仕事上での目標(近未来ヴィジョン)の明確さ＝“仕事欲”の強さ
- ④ ライフスタイルの好み

上記の要因で就職地の決定に際し、まず影響があるのは③である。すなわち、仕事上の明確な目標や強い欲求、換言すれば“仕事欲”が強い者は県外に就職する。その理由が①である。地方都市は大都市に比べ採用人数のキャパシティが小さく、就くことができる業種・職種の選択肢の数が少ない。そのような“乏しい”就業機会では若者の希望を満たすことができない。さらにこのことは、「プライド」の問題とも密接に関連する。“仕事欲”が強い者は、企画に携わる人数やそれに費やされる費用、仕事の結果として得られる利益やその社会的影響、仕事の対象となる顧客の数(企業が対象であればその規模)などに関して、より「大きな仕事」をしたいと思う。しかし県内での活動を主とする地元の企業に就職すれば、そのような「大きな仕事」に携わることは難しくなる。また“自立”が進まない多くの地方都市には、起業ムード・向上意識が乏しく、上記のような若者を惹きつけることができない。

次に影響が大きいのが②である。長男である者が強い“仕事欲”を持たない場合、地元就職志向になる。これは将来の親の面倒、イエの継承といったことへの責任感によるものである。また仕事欲の強さの影響度がきょうだい構成の影響度よりも大きいことは、「親の面倒をみる」ということに関して、県内就職者と県外就職者間に大きな意識の違いがないことで説明できる。

最後に、各々のライフスタイルが影響する。ただし、この要因は上の要因に比べその影響力が小さく、これだけで就職を決める要因にはなり得ない。

また今回の調査では、地元帰還者数と地元流出者数の割合、またそのそれぞれの就職地決定要因について、山形・鶴岡両都市出身者間に明確な差は確認できなかった。その理由は、二都市間の就業機会格差が、大都市－地方間のそれに比べ、相対的に小さいことと、調査対象とした人々にとって、「親の面倒」や「家の継承」の問題にまだ現実味がないことであると思われる。

最後に、地方の“自立”には若い優秀な人材の確保が絶対条件であり、そう考えると地方大学の存在意義は重要である。日本の地方都市にも、アメリカのシリコンバレーのように、自発的發展を拡大させるメカニズムが構築されることが望まれる。